

カルロス・ガルデルに 捧げる ゆうべ

2012.6.22 N.N.Estudio



Carlos Gardel

●アーティスト、カルロス・ガルデルのあゆみ●

20世紀になって数年後には、ブエノスアイレス市アバスト市場の地区を根城にして、政治家(町の顔役)の後援会のアトラクションなど歌っていたらしい。ただし定職ではなく、また一生を通じて住所不定だったといつてよい。

レパートリーは、いまでいうフォルクローレだった。パジャドル(草原の吟遊詩人?)の語り物のうたをまじえた、いわゆる民謡調の曲——それが、当時のアルゼンチン〜ウルグアイの民衆・大衆の歌のすべてだった。

1910年ごろ、ほぼプロ歌手といえる存在になっていた。

1913年に初めてのレコードが、当時の最有力レコード会社から発売された。ギターを自分で弾きながらうたい、全14曲が今日まで残っている。リズムは、エステーロ(あいだにサンバ舞曲のリズムが入る、自由な抒情歌)8曲、シフラ(パジャドルの物語り歌)1曲、カンシオン(ハバネラのリズムなどの歌曲)2曲、ワルツ2曲、ビダリータ(草原の抒情歌曲)1曲だった。レコード会社の雑誌広告では「カルロス・ガルデル——ナショナル劇場のテノール歌手」と紹介されていた。

このころ、すでに友達で、いっしょに地方巡演したこともある、ウルグアイの生まれの(4才からブエノスアイレス)ホセ・ラサーノと、正式にデュオを組み、最高級キャバレー＝レストラン《アルメノンビール》にデビュー。

1917年、アルゼンチン各地に映画館〜劇場チェーンをもつ商会に契約され(伴奏ギタリスト:ホセ・《ネグロ》・リカルド)、その商会のレコード・レーベル《オデオン》に録音。デュオ・ガルデル＝ラサーノ12曲、ガルデルのソロ7曲、ラサーノのソロ4曲。

このガルデルのソロの中に、タンゴ『わが悲しみの夜 *Mi noche triste*』が入っていた。真のタンゴ歌曲のレコード第1号である。

1919年から安定したペースでレコード録音がつづく。ガルデルのソロの割合、そしてタンゴ歌曲の割合はどんどん増えた。たとえば1925年には、135曲も(ほとんどがタンゴの新曲)録音している。やがて演奏だけで有名になる『ラ・クンパルシータ *La cumparsita*』も、ガルデルがレコード録音したのが広く知られるきっかけだった。(『わが悲しみの夜』と同じ作者が、歌詞と、新しいメロディを付けた。1924年)

1925年に、デュオは解消し、ガルデルはソロ歌手、ラサ

ーノは彼のマネージャーになる。

伴奏ギタリストには、1921年からギジェルモ・バルビエーリ *Guillermo Barbieri*、28年からホセ・マリーア・アギラル *José María Aguilar* といった、すばらしい音楽家たちが加わった。

1923年、劇団チームに加わって初めてスペイン公演。

1928年、初めてのパリ公演。翌年イタリアへも。

1930年、パリで初の映画撮影。『ブエノスアイレスの灯 *Luces de Buenos Aires*』。

1932年、フランス、イタリア、イギリス、オーストリア、ドイツ、スペインの大都市で公演。9月から、『場末のメロディ *Melodía de arrabal*』など映画撮影。脚本家・作詞家アルフレード・レペーラ *Alfredo Le Pera* との共同作業の始まり。

1933年9月にブエノスアイレスを出航。まずパリへ向かった。その後、アメリカ合衆国へ。大晦日に、NBC放送の(たぶんラテンアメリカの聴取者のための)特別番組でデビューした。ガルデルの専属ピアニスト・アレンジャーは、彼の推薦でブエノスアイレスから来たアルベルト・カステジャーノス *Alberto Castellanos*。

1934年、ニューヨークで映画『下り坂 *Cuesta abajo*』『ブロードウェイのタンゴ *El tango en Broadway*』を撮影。音楽監督は、NBCのラテンアメリカ部門の音楽顧問だったテリグ・トゥッチ *Terig Tucci*。強行スケジュールをこなした後、フランスで一時期休暇。パラマウント社のミュージカル・アーティスト顔見世映画に出演。

1935年、1〜2月に、映画『想いのとどく日 *El día que me quieras*』『タンゴ・バー *Tango Bar*』を撮影。

4月ニューヨークを発ち、映画のプロモーションを兼ねた、ラテンアメリカ諸国の劇場・放送局出演のツアーを開始。その途中、6月24日、コロンビア国メデジンの空港で、小型機が離陸に失敗し炎上。ガルデルは、ギタリストのバルビエーリ、作詞・脚本家レペーラたちとともにこの世を去った。ギタリストのアギラルは、失明したが命をとりとめた。彼はこの事故について、一生固く口を閉ざしていたので真相はわからない。

第1部

音楽家カルロス・ガルデル

高場 将美 (はなし)

1. ラ・マリポーサ (蝶) *La mariposa*

詞: アンドレース・セペーダ *Andrés Cepeda*

曲: カルロス・ガルデル *Carlos Gardel*

●ギター: カルロス・ガルデル (1912年録音)

●曲の形式は、《エステロ》といって、アルゼンチン〜ウルグアイ全域で愛されていたフォルクローレ歌曲です。リズムにとらわれない自由な歌に、8分の6拍子の舞曲調がはさまれます。伝統のメロディ・パターンによって、ガルデルの個性を入れて歌った(つまり作曲した)わけです。

歌詞は、無頼の詩人セペーダが、獄中でつづった詩です。セペーダは、1910年に、場末のカフェ(今日タンゴの店《エル・ビエホ・アルマセーン》のある地域)で、犯罪者たちの争いで、ナイフで刺され死に

ました。31才でした。

ガルデールは、セペーダの詩をたくさん暗記していて(交際もあつた)、最初の録音で多く歌い、後にも録音しなおしています。

「軽やかに飛ぶ蝶は、とりどりの美しい色を持っている。朝には線の魅惑があり、星には輝きがある。花たちには香りがある。住んだ泉には神秘がある。野には、みずみずしさがある。風は、あまい歌を持っている。鳥たちにはさえずりがある。わたしのもっているのは、ただ、苦悩だけ」

2. あわれな女 (原題『エル・モティーボ』)

Pobre Paica (El motivo)

詞：パスクワール・コントゥールシ *Pascual Contursi*

曲：フワン・カルロス・コビアン *Juan Carlos Cobián*

●ギター：ホセー・リカルド (1920年?録音)

●コントゥールシは、1914~16年に、ウルグアイの首都モンテビデオのキャバレーに歌手として出演中に、演奏を聴いて気に入ったタンゴに歌詞を付けてうたうことを始めました。劇のセリフのような物語性をもったタンゴ歌曲の創始者です。

作曲者は、ピアニストで、今日のタンゴ楽団の演奏法の先駆となった編曲指揮者でもあります。

ガルデールは、セペーダの詩をたくさん暗記していて(交際もあつた)、最初の録音で多く歌い、後にも録音しなおしています。

「かつては、いちばん美人のキャバレーのダンサーだった女よ、あのタンゴの夜ごと夜ごと、おまえは宴(うたげ)の女王だった。きょうは着るものもない。靴もドレスもない。病におかされ、友達に彼女の部屋になにかもってきてくれることもない。

バンドネオンから出てくる、なにかタンゴの旋律を耳にするとき——あわれな、ぬかるみの花!——彼女は過ぎた時へのノスタルジーでふるえる。快樂と恋愛の時代……今では、残ったのは苦い味だけ。それが彼女を涙に誘う!」

3. マノ・ア・マノ (五分と五分)

Mano a mano

詞：セレドニーオ・フローレス *Celedonio Esteban Flores*

曲：カルロス・ガルデール *Carlos Gardel*

ホセー・リカルド *José Ricardo*

●ギター：リカルド (1923年録音)

●ルンファルド(ブエノスアイレスの隠語・スラング)を多用しながら、伝統的な長い物語詩のスタイルを守って書いたセレドニーオの詩を雑誌で読んで感心したガルデールは、それを見事に語り歌うことで、タンゴの歌いかたを發明しました。ギタリスト、リカルドの前・間奏も、(歌と同じ伝統的なフォルクローレに根ざしていますが)陰に隠れています。革命的といえるかもしれません。

「……わたしは、おまえに感謝しなければいけないことは何もない。わたしたちは五分と五分だ。おまえから受けた恩はすっかり返したと思う。もし小さな借りがまだ残っていたら、おまえがつかまえているバカ男の感情につけておいてくれ。

……そして明日、おまえが壊れた古家具になって、あわれな心に希望もなくなってしまうとき、もし何か助けがほしかったら、忠告がいるようだったら、おまえの

友達であるこのわたしのことを思い出してくれ。この体をすっかり差し出すよ、できることはなんでも おまえを助けるためなら、その時が来たら」

4. 口笛を吹きながら *Silbando*

詞：ホセー・ゴンサーレス・カスティージョ *José González Castillo*

曲：カトゥロ・カスティージョ *Cátulo Castillo*

セバスティアーン・ピアーナ *Sebastián Piana*

●ギター：ギジェルモ・バルビエーリ/ホセ・マリーア・アギラール

ノドミンゴ・リベロール *Domingo Riverol* (1930年録音)

●ゴンサーレス・カスティージョは、当時のアルゼンチン演劇界の大物(劇作家・劇団監督)で、ガルデールが大芸術家であることを最初に認めた人のひとりです。この曲は、ゴンサーレス・カスティージョの息子カウロが、彼のピアノの先生だったピアーナと半分ずつ作曲し、父親に歌詞をつくらせられました(1923年)。

ガルデールは、口笛を入れる演出や、歌詞を入れ替えたりする編曲で、この曲に完璧な形を与えました。メロディのごく一部ですが、改良しています。

「南バラカス地区(今日のアベジャネーダ市)の1本の通り。とある夏の夜。空がもっと青く、イタリア船の歌声がもっと甘いとき。街灯が、消えそうな光で、影の中でまたたいている。そして、とある軒下で、色男が恋人と話している。

ドックの奥のほうから、けだるい哀歌をうめきながら、単調なアコーディオンのひびきを、こだまが運んでくる。そして空を横切っていく、どこかの野良犬の吠え声。そして、なにか考案に沈んで、ならずものがひとり、とある歌を口笛で吹きながら行く……」

5. 靴屋のジュセツペ

Giuseppe el zapaterto

詞&曲：ギジェルモ・デルチアーンチオ *Guillermo Del Ciancio*

●ギター：バルビエーリ/アギラール/リベロール (1930年録音)

●作者は、ガルデールの若いころから、同じ町内で親しくしていたバンドネオン奏者です。演奏活動は、ほとんどアルゼンチン南端の町々の酒場でした。

「トントントンと叩いてる、靴直しのジュセツペ。葉巻を吸わずに、噛んでいる。節約して、息子に大学に行かせるんだ。ああ、おまえのお母さんが生きていたらなあ!……」

6. 古きレコーバ (アーケード通り)

Vieja recova

詞：エンリーケ・カディーカモ *Enrique Cadícamo*

曲：ロドルフォ・シアマレッタ *Rodolfo Schiamarella*

●ギター：バルビエーリ/アギラール/リベロール (1930年録音)

●作詞者は、タンゴ歌曲のすべての題材を採りあげ、非常に多くの愛される歌詞をつけた詩人です。この曲は、ブエノスアイレスの港に近い場末の街の、昔ながらのアーケード通りでの一夜の経験をつたっています。作曲者はピアニストで、大衆の心をとらえるメロディづくりのうまさを、業界でたいへん高く評価されていました。

「このあいだの夜 わたしは酔っ払いのように歩きながら、一步一步 足を運び、ひとりぼっちで悲しく、歩道伝いに街をめぐるにいた——そんなとき、わたしは悩みの刃（やいば）がせまってくるのを感じた。悩みはわたしを裏切って、わたしの心臓に、本気で切りつけようとしていた。

そちらに目をやると、見るも哀れなボロ服を着て、ひとりのかわいそうな女が ほどこしを求めて、みずからの不幸の数々を嘆きながら、わたしのそばに近づいてきた。そして わたしが数枚のコインを その物乞い女に投げてやったとき わたしは見た、恥ずかしさでいっぱい顔を彼女が両手で覆うのを。

古きレコーバ（アーケード通り）、おまえは彼女の人生の最後の片隅。わたしは年老いて見捨てられた彼女を見つけた、宿命の見本として。悪運が彼女におそろしいカードを突きつけ、運命の表と裏が逆転したのだ。

古きレコーバ、おまえにわかるだろうか、どれほどの痛みか！」

7. わがいとしのブエノスアイレス

Mi Buenos Aires querido

詞：アルフレード・レペーラ *Alfredo Lepera*

曲：カルロス・ガルデル *Carlos Gardel*

●編曲指揮・第1ヴァイオリン：テリグ・トゥッチ

ピアノ：アルベルト・カステジャーノス（1934年録音）

「わたしの いとしいブエノスアイレス。ふたたび わたしがおまえに会うときには、もう悩みも忘れることもなくなっているだろう……

わたしの生まれた町の通りの街灯は、わたしの数々の愛の約束の見張り番だった。そのおだやかな光の下でわたしは見た、太陽のように輝いているわたしの少女を。きょう 運命がふたたびわたしをおまえに会わせようとしているとき、わたしの唯一の愛のブエノスアイレスの街よ、わたしには バンドネオンの嘆き声が聞こえる、胸の中で心臓が走り出して止まらない。

わたしのブエノスアイレス、花咲く土地。そこでわたしは、人生を終えよう。おまえに守られていれば、偽りに傷つくことはない。

年月は飛んでいき、痛みは忘れられる。

キャラバンをつくって、思い出たちが通り過ぎる、感動の輝きをもった光が、尾を引いていくように。わたしは おまえに知ってほしい——おまえを思い起こすとき、心の悩みが去っていくことを」

8. わがいとしのブエノスアイレス

Mi Buenos Aires querido

●映画『下り坂』より（1934年撮影）

9. 古い時代 *Viejo(s) tiempo(s)*

曲：カルロス・ガルデル *Carlos Gardel*

アルベルト・カステジャーノス *Alberto Castellanos*

10. ながい下町 *Arrabal amargo*

詞：アルフレード・レペーラ *Alfredo Lepera*

曲：カルロス・ガルデル *Carlos Gardel*

●映画『タンゴ・バー』より（1935年撮影）

●編曲指揮：テリグ・トゥッチ

第2部

ガルデルのレパートリーから

峰 万里恵（うた） 高場 将美（ギター）

1. ながい下町

Arrabal amargo

詞：アルフレード・レペーラ *Alfredo Lepera*

曲：カルロス・ガルデル *Carlos Gardel*

ながい場末の町——わたしの人生に入りこんでいる、ひとつの呪いの刑の宣告のように。おまえの影たちは、わたしの眠れない時間を拷問し、

おまえの夜は閉じこもる、わたしの心の中に。

彼女がそばにいるとき、わたしはおまえの悲しさが見えなかった、おまえの泥、おまえの貧しさが——彼女はわたしの光だった。そしていま打ち負かされて、わたしは魂を引きずってゆく、おまえの通りに釘付けにされて、まるで十字架に付けられたように。

場末の小さな片隅——わたしの愛するおまえの中庭の 星たちのテントをいたたい。すべて すべてが輝いている、彼女がおまえに会いに来るとき。そしてわたしのマドレセルバ（すいかづら）たちは、おまえを愛するために花ざかり。過ぎてゆくひとつの雲のように、わたしの夢たちは去ってゆく。去って行き、もう帰ってこない。

だれにも言わないで、あなたがもうわたしを愛していないと。わたしは人から聞かされたら、あなたは帰ってくるだろうと言おう。そうすれば あなたが帰ってきたとき、わたしのいとしい魂よ、わたしは誓う——見知らぬ人たちの目が 驚くことはないだろうと。

あなたは見るだろう、すべてがあなたを待ち焦がれていることを。わたしの白い小さな家と、きれいなバラの木。そして、わたしの古い場末の町は、まるでよみがえったように、その悩みを軽くするだろう——晴れ着をまとって。

2. アニョランサス（追想）

Añoranzas

詞&曲：ホセー・マリーア・アギラール *José María Aguilar*

凍った北風が花たちを殺した、わたしのバラたちを。わたしの最愛の時代から残されたものは、ひとりぼっちで見捨てられた階段の手すりだけ。

中庭には同じ泉がある。わたしの歌を聴くことができた泉。でもそのそばで、痛ましい声で、冷酷な冬がうたいに来る。

でも冬は、その悲しい支配を、もうすぐ終えるだろう。ふたたび、あの美しいものたちがやってきて、全世界が幸せに笑うだろう。わたしの魂はデリケートな花。痛みの前に屈しなかった。なぜなら、あなたに熱愛されているのを知っているから。なぜなら、いつもあなたの愛が守っているから。

3. わたしの母に

A mi madre

詞：アンドレーヌ・セペーダ Andrés Cepeda

曲：カルロス・ガルデル Carlos Gardel

ホセ・リカルド José Ricardo

おいで うるわしく美しい 豎琴、おまえのハーモニーをこばまないでくれ、わたしにおくれ おまえのメロディとともに とても大きな靈感を。

おまえはいつもやさしさにあふれていた、あらゆる歌い手に対して。打ちひしがれた悲しい ひとつの魂への情けをこばまないでくれ。わたしは母をもっている、その人にうたいたい わたしの愛を。

あなたは あなたの胸の中にわたしを運んだ、わたしに命をくれたとき。美しい 愛する母、愛撫でわたしを満たした。愛情に満ちてわたしにキスした、あの幼かった時代に。その後 悩みと悲しみに満ちた朝が来て、見つめることになった、あなたの黒い髪の上に、わたしゆえの初めての白髪。

あわれな母！ わたしが たぶん悪いのだ——人生での はかりしれない大きなあの痛みを あなたが老いの中に感じているのは、あなたは それにひきかえ、わたしの幼いとき、わたしに命と熱をくれた、熱くわたしにキスした、わたしの人生の花の時代に。そして わたしは冷淡さをもって、そして わたしは冷淡さをもって、ただあなたに痛みだけを与えた。

あなたの両目は わたしの道の光になるだろう。それは信じる心をもってわたしをみちびいていく、希望と輝きの小道を通して。なぜなら あなたの両目は わたしの愛するものだから！

4. ポル・ウナ・カベーサ

Por una cabeza

曲：カルロス・ガルデル Carlos Gardel

●ギター・ソロで聞き流してください。ガルデルならではのメロディです。本人もお気に入りだったはず。

5. わたしの黒い花たち

Mis Flores negras

詞：フーリオ・フローレス Julio Flórez

コロンビア伝統曲

お聞きなさい わたしの情熱たちの廃墟の下に、そして もうあなたが楽しませることがないこの魂の底に、夢たちのほこりのあいだに 凍りついたように わたしの黒い花たちが咲く。

花たちは つぼみとなった わたしの痛みたち。わたしの体の中に その根を埋葬する。激しい痛みたち——山の湿った割れ目の羊歯（しだ）たちのように。

花たちは あなたのさげすみ あなたの厳しさ。花たちはあなたの裏切り あなたのよこしまさ。震えて 焼き尽くすあなたのキスたち——花びらとなって、黒く冷たく。

花たちはあの時間の思い出たち。そこではわたしの腕に囚われてあなたはまどろんだ。そのあいだ わたしは朝の光を求めてため息をついた、あなたの両目の朝の光

……わたしのものでなかった朝の光！

6. 想いのとどく日

El día que me quieras

詞：アルフレード・レペーラ Alfredo LePera

曲：カルロス・ガルデル Carlos Gardel

わたしの夢を愛撫する あなたのたぐいきの やわらかいつづやき。あなたの黒い目がわたしを見たいとなると、どれほど人生が笑うことだろう！ としても、ひとつの歌のような あなたの軽い笑い声が わたしを守ってくれるなら、わたしの傷はいやされ、すべてが忘れられる。

あなたがわたしを愛してくれる日、華やかなバラは、いちばんすてきな色の晴れ着をつけるだろう。そして風に向かって鐘たちは、あなたがもう わたしのものだと告げるだろう。そして あなたの愛を語り合うだろう。

あなたがわたしを愛してくれる夜。空の青さから、嫉妬ぶかい星たちが、通り過ぎるわたしたちを見ているだろう。そして神秘の光線が、あなたの髪の上に巣をつくるだろう。それは見たがり屋のホタル。あなたがわたしのなぐさめだと見とどけるだろう。

7. ボルベール（帰郷） Volver

詞：アルフレード・レペーラ Alfredo LePera

曲：カルロス・ガルデル Carlos Gardel

わたしの目には見える気がする、遠くでわたしの帰郷道を定めている光たちのまたたき。そのおなじ光たちが、かつては青白い反映で、痛みの深い時間を照らしていたのだ。

帰るのをのぞまなかったのに、人はいつでも最初の愛に帰ってゆくもの。あの古い通りで、いつか、こだまが言った「あの人の命はおまえのもの、あの人の愛はおまえのもの」 そのとき、あざけるように見下ろしていた星たちが、きょうは冷ややかに、帰って行くわたしを見ている。

わたしはこわい、わたしの人生を正面から見つめようとして戻ってくる過去と出会うのが。わたしはこわい、数々の思い出のくさりで、わたしをしばりつける夜が。でも逃げてゆく旅人は、遅かれ早かれその歩みを止める。そして、すべてを破壊する忘却が、たとえわたしの古い夢を殺してしまったとしても、わたしはとでもちっぽけだけれど希望を隠し持っている。それがわたしの心の財産のすべて。

帰っていく……額（ひたい）は枯れ、「時」の雪がわたしのこめかみを銀色に染めた。感じる……人生は風のひと吹きだと、20年は「無」にすぎないと、熱にうかされたまなざしが影の中をさまよいながら、あなたの名を呼んでいるのを。

生きてゆく……魂は甘い思い出にしがみついたまま。その思い出にふたたびわたしは泣く。